
高校生日記？

そーイヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生日記？

【Nコード】

N 6 4 1 4 A

【作者名】

そうイヤー

【あらすじ】

何処でもいる？高校生の生活です！

第1話：朝（前書き）

最後まで読んでいただけると幸いです。

第1話：朝

チュン、チュン。

小鳥が朝日を浴びて鳴き出す。

「うん……」

それを聞いて嫌々起きる少年がいた。その少年は起きて自分を鏡で見る。

「うん。今日もバツチリだな。」

「なに鏡を見てニヤニヤしてんのよ！朝っぱらから！」

「何だ。奈々葉か。」

「何だとは何よ。このナルシスト！」

「それはビミョーに傷つくぞ？」

「うつさい。ロリコン。」

「だから人の部屋に入って来て兄ちゃんをいじめるな。」

「まあいいや。優にいご飯だつて。」

「わかった。」

一様読者に説明しよう。

俺は木ノ下優祐。せいりゅう清流高校の2年生でもちろん男だ。

身長は160センチぐらいで髪は黒で顔立ちは女っぽい何とも普通な高校生だ。

それからさつき部屋には行ってきた奴は木ノ下奈々葉。同じ清流高校に通っている1年生だ。もちろん妹でもある。身長は俺と一緒にくらいかな？顔はまあまあかわいいほうでモテるほうだ。どこまでも真つすぐ綺麗な明るい赤の髪が僕と全く違ってる。そして誰に似たか分からないが物凄い口が悪い。というか毒舌なのかな！どれだけいじめられたことが……

まあこんな感じですね。

そんな事考えながらしたにおりる。

「あらおはよーん 優ちゃん」
出た親バカ。

「……おはよう。」

「あら！挨拶してくれるなんてママさん感激」

「挨拶しないと泣いて、何で挨拶してくれないの！ママさんの愛情が足りないのね！じゃあ愛のチューで はいおいでチュー とかいってるだろ！」

「あらあん ばれちゃった！てへっ（笑）」

「てへっじゃねーよ！！」

「まあまあ二人とも！時間が無くなるよ！」

この人は木ノ下麗子。年齢は永遠の二十歳らしい。それだったら俺

を産んだとき3歳ということになる。はつきりいつてギネスのるか
ら嘘であろう。それと子の家には禁句がある。それは……

「おばさん」

である。もし聞こえたりしたら明日の朝日が見えないことであろう。
とにかく怒ったときは恐いのだ。

「それでおふくろ。朝ごはんは？」

そしておふくろは、

「あ・た・し・よ」

「さて奈々葉行こうか。」

「まってえ！ママを置いていけないで」

「うわああ！おふくろ半分脱げてるって！」

「だって朝ごはんは私！食べちゃって！」

「逃げるぞ奈々葉！」

俺と奈々葉は慌てて家を出た。

第二話 ストーカーな隆

急いで俺と奈々葉は家を出たわけだが……

「いようゝ！優祐ゝ！」

きた。第二のくるくるパー野郎。

「なんだ。隆。」

「なんだ。とは連れないなあゝ！淋しそうな優祐とせっかく俺が一緒に登校してやろうとしてるのにさ！」

「隆が淋しいからだろ！毎朝いつつも人ん家の前で『まだかな…グヘッ』とか言ってるくせに！だから近所の皆様が朝は遠回りして保育園に連れて行ってんだよ！この家を通らないようにってな。」

「そんなはずはない！俺は最近みるぞ！子供と一緒に歩いているおじさんを！」

「ほう。」

「黒いサングラスをかけて子供にキャンディーを上げて一緒にどこかにいく見るからに怪しい家族。」

「明らかに誘拐だろうがアアアアアア！」

「でも奥さんラシキ人が来て、『早く乗って』って行って連れていったがな！」

「ああ……アホダ…何でお前はそんなにアホナンド。」

頭をかかえながら隆に俺は聞いた。隆は少し考え口を開く。

「生れつきかな！」

いっちゃったよこいつ。満面の笑みでいっちゃったよ。考えつかなかったからだな。満面の笑みなら許してくれるみたいだ。うん。…
……死ね！

「！？ぐひゅ！……う……」

おもいつきり腹に右ストレート。明らかに痛い。これはドクターストップだな！

「ねえ優にいい。早く行こうよ！」

「そうだな！この馬鹿は……ほって行こうか！」

「うん」

あ！一様説明しましょうか！

さつき死んだやつは、田中^{たなか}隆^{たかし}小さい頃からの幼なじみで同じ清流高校に通っている。もちろん同じ学年だ。去年までは一緒のクラスだったが、今年はクラスを離れた。俺は最高だったが隆は泣きながらしがみついて『何で俺はお前と離れなきゃいけないんだよぉ！あれか！このまま離す気ですか！先生よ！いや神よ！何なんですか！』とかいってた。俺にとっては知らないよ。って感じた。それからストーリーカー見たいになったのです。こちらにすればいい迷惑ですね。全く……

「ねえ。優にい！」

「どうした？」

「後ろから変なの走って来てない？」

俺は後ろを恐る恐る見てみる……

「優〜祐〜え！」

「奈々葉。」

「何優にい。」

「逃げるか。」

俺達はやっぱり逃げることにした。

だってさすがに怖いよ。地面を這いながら普通の歩く程度より早い早さでおってくるんだもん。誰だって逃げるよ。

そのまま奈々葉と別れ教室に逃げ込んだ。

「ふう……疲れるわぁ。」

「毎日変態に追われて大変だねえ！」

「あ。円香さん！ホントなんですよ〜。助けてくださいよ！」

「優〜祐〜！」

きたよ！ここまできちゃったよ！

「円香さん助けて！」

「わかったわよ　そのかわり後から買い物着いて来てね」

「はい！買い物にでもなんでも行きますから！」

「了解」

この優しい人は、高円寺円香さん（こうえんじまどかさん）俺が高校生になってから初めて友達になった人だ。

身長は167センチぐらいでどっちかと言うと姉さんって感じな人だ。真っ直ぐ腰の辺りまでのびた黒の綺麗なストレートの髪で、半端なく力が強い。柔道をやってクロオビだったりするしね。隆とも知り合いで、犬猿仲だ。「円香」！また俺のスイートタイムを邪魔する気かあアアアアア！」

「知らないよ。優祐にストーカー見たいに張り付いてるのがホントにスイートタイム？笑わせる。」

「ば、馬鹿にするなあ！」

「ふふつ。バカネエ隆は」

「円香……お前コロスケ！」

コロスケ？キテレツ大科の？あいつ大丈夫か？

「俺は大丈夫だあ！優祐！」

うわあゝうざい。親指立てながら笑うなよ。しかも俺が思ったこと読むなよ。

「円香さん」

「なあゝにい？」

「やって下さいな」

「了解」

了解と言った瞬間隆は吹き飛んで廊下にいた。

「蹴り一発ですか さすがです。」

「じゃあ帰り着いて来てね」

しまった。円香さんの買い物は、ヤバイぐらい長いし買っ量が半端ではないのだ。

「また今度に……」

「じゃあ放課後ね」「ま、円香さん！また今度に……」

「じゃあ放課後ね」

振り切れない……

「またゆつくり買い物はしましょうよ！」

「放課後ね」

「はい……。」

ああ。満面の笑みで頼まれちゃ勝てない……

「来なかったら殺しちゃうぞ」

「さりげなく危ないこといわないで下さい……」

結局放課後買い物に付き合わされることになりました。

第三話 円香さんと買い物

授業がなんなく終わっていき……

~~~~放課後~~~~

……………逃げるか。

「優祐ちゃん」

げっ……

「どこに行こうとしてたのかなあ？」

「いやあ〜トイレに……………」

「嘘いったら殺いちゃうぞ」

恐いよ……。

「じゃあ行きましょうか」

「はい……………」

そうして円香さんと買い物に出たわけですが…

「なあなんで隆がいるんだい？」

「優祐について来た！」

おっと満面の笑みで走り込んで来たぞー。まじで死ねばいいのに。

「円香さんーやっちゃってください」

次の瞬間

「ファイヤー！」

どこかに飛んでいった。

「さて行きましょうか。」

そしてやって来たところは、【なんでも揃ってると思うよ?】という店だ。なぜに疑問系かわからないが以外となんでも揃っている。

「さてー今日は何を買おうかしらねー」

「あまり買わないでくださいよ?」

「わかってるわ さてと……………」

いそいそと店の中に入っていく円香さんと隆……………え!?なんで!??あいつどこかに吹っ飛んでいったはず!……………この近くに落ちたのか……………。

「さてー優祐の服をなにか買ってやるかなあー」

「気色悪いわあ!」

「へブルユアリー!!」

綺麗な放物線を描いてマンホールの中へホールインワン! うん! 我ながらナイスショット!

「さてと買い物しようかな。」

ある程度自分の買い物を終わらして円香さんのところに行くところ……何だあの山。服積み過ぎでしょ。

「あ! もうちょいで終わるから一時間ぐらい待ってて」

もうちょいって時間じゃないだろ。明らかにまだまだかかるだろ。

「まあ今日はこれくらいにしようかな」

やばい……服のタワーが……何ですかあの量。

「今日はかなり押さえたわね。」

おいおい。どこがだよ……

「会計三万円ちょうどになります。」

「めっちゃ安めね。」

そういつて円香さんは諭吉さん3枚を出して買い物を済ました。問題はどうかだ。どう考えても一人じゃ持てない……

「優祐〜！」

やつを使うか……

「隆君〜」

「どうした！優祐！」

「働け。」

「優ちゃんごめんね〜お礼に御飯でも食べに行こうね」

「そのまえに荷物重くないですか？」

「御飯でも食べに行こうね」

逆らえない……………

「御飯でも食べに行こうね」

「はい……………」

「じゃああそこに行こうね」

円香さんが指差したのはどこにでもありそうなカフェを指差した。

「いらっしやいませー3名様ですね！奥の席へどうぞ！」

隆も一緒だったか……

「ま、いいか！」



隆を合わせた3人で席に座った。

「私はコーヒーで。」

「じゃあ俺も!」

「じゃあ俺も優祐と同じで!」

円香さんと一緒でもいいだろ!

「ねーね!優祐!」

「どうしました円香さん?」

「私を買った服来てみる?」

「いやいやいや!俺が女の服似合う訳無いじゃないですか!」

「似合うはずだぜ!優祐なら!」

満面な笑みかよ……

「ね!一回だけ!」

そおいつて出してきたのはいかにも危ないビキニだ。つかこれって服なのか?

「服だから安心してね!」

「いや危ないです!」

「大切なものが出ちゃうから？」

「俺はみたいぞー！」

「おまえはだまれー！」

「びふぁー！」

ふう。馬鹿は死んだか。って馬鹿は死んでも直らないか。

「んで着てみてよ」

「いや遠慮させていただきます。」

「着てみてよ」

「いや……それは……」

「着てみてよ」

そんな恐い目で見ないでください。つか手がグーになってるし！殺される……

「ねえー！似合うでしょ」

結局その服？を着せられました。しかも隆に写真を取られとさ。

#### 第4話 変態って……（前書き）

なんか最後まで書きたかったんですが保存できなくて中途半端な終わり方になりましたが気にしないで読んでやってください。

#### 第4話 変態って……

なんだかいろいろあったけど今日はかなり疲れたなあ〜とか考えながら帰路についた優佑は……

「優佑」

隆に捕まっていた。

「優佑ちゃん 連れないじゃん！」

「うるさい！変な写真撮りやがって……ああお前と出会わなければ俺は汚れてなかった……」

「俺のせいじゃないぜ！優佑の本能で今のお前になってるんだぜ！」

「きもいわ。」

お腹に正拳を一発！

「ぬるいわ！ふはははは！」

か、かわされた！こいつ……

「ふはははは……グヌオツ！」

かわされたので股間の紳士に蹴りを一発！そして倒れた隆にネリチヤギ（踵落とし）を腹部に一発叩き込んでおいた。これでしばらくは動けまい。

「俺はかえるからなあ〜あとさっき撮影された写真は全部没収な。」

「ぬおーおおあ！それだけは堪忍を！」

「無理。没収。」

「ネガだけは！ネガだけはくさいますい〜」

「うわあ〜うねうねしながら頼んでるよ。気持ち悪いなあ。ネガと写真取り替えて知らん顔してかえろつと……………ん？何だこのアルバムは！」

「みるなあ！お願いだ！みるなあ！」

「うん。わかった！」

「おお！さすが優佑！」

「全部見とくわ。」

これで俺の写真が出て来たら困るしねえ！

……………

……………

…

「なあ。コレナニ？」

「優佑コレクションだ！すばらしいだろ！」

予想はしてたけど……

「没収」

「や、やめてくれえ……」

「なんか文句ある？」

ものすごい隆が脅えてる。多分物凄い何かに脅えてるんだろうね、  
怖い怖い。

そのまま隆を放置して帰った優佑だったが……

「おかえり」 優佑ちゃん「」

忘れてた。ここには部屋に帰る間での最終砦があったんだ。もしさ  
つき没収した写真がばれたら大変だ。

「あら？優佑ちゃん 何を持ってるのかしら？」

ば、ばれた！やばいよ……

「なんでもないよ！ってか何も持ってないよ！ほら！」

俺は鞆の中に全てを突っ込みしらばっくれることにした……が、

「あら？ なにか落ちたわよ？ おかあさんに見してみなさい」

やべえ！ お袋の顔なにか興味を持ったときに出る顔になってやがる！  
じりじり距離を詰めてくるお袋。全てを諦めかけてた瞬間。

「おかあさん。体操のお兄さんがやってる美容にいい運動始まるよ。見ないの？」

「まあ、やだこんな時間？ 体操のお兄さん見なきゃ」

俺のことなんて忘れたようにリビングに向かつていった。いやあ、助かりましたな。今回は体操のお兄さんに感謝ですな。

「優に。なんで自分の写真を撮ってるの？ やっぱナルシストだったんだ。」

そおいつて階段をテクテク上がっていく奈々葉。

いやあ、全てが終わりましたな。ハハハハハ。

「ハハハ。サテオヘヤニモドロー。ハハハハハ。」

俺は若干おかしくなりながら部屋に戻った。

「お邪魔しないようにお邪魔してるぜ！」

「なんでいるんだ。テル。」

「え？ 暇だから。」

こいつの名前は内山輝樹。小さい頃からの連れだ。何て言うか腐れ縁と言うか腐れ縁だ。こいつは隣町の幻舞高校げんぶこうこうに通っている。

「それで、お前が来るってことはなんかあつて来たんだろ。用件をいいなよ。」

「鋭いねえ。さすが俺の親友だ！んでだ。話っていうのはな……………」

「うんうん。」

「今5月の半ばだろ？」

「うんうん。」

「それなのにまだこいのぼりつけてる家があるんだぜー！超受ける！」

「うん。帰れ。」

「何だよ。つれないなあ。」

「うるさい。俺は今日いろいろありすぎて疲れてるんだ。一刻も早く睡眠が取りたいんだ。今何時だと思っている。」

「え？9時2分！」

「分かってるなら帰ってくれ。俺は九時に寝ないと駄目なんだ。」

「またまた！そんなこといってなんか変なことしようとしてない



だろうなあゝ！」

「お前と違うんだテル。だから帰れ。あと人ん家に来るときは電話くらいしろ。」

「わかったよゝまた明日来るからなあゝ！」

ふざけるな。これ以上こられてもこっちがかなり困る。毎回こいつは自慢かくだらない話をして帰るからな。この前なんて、『猿も木から落ちるんだって！ギャハハだせーの！』とか言つてやがった。当たり前だ。猿にだって失敗はある。なんでも出来る猿はこの世にいないゝはずだ！

「まあ帰るわ！」

「ああ。」

そおいつてテルは帰っていった。

「全く……………まあいいか。つかあの鞆一杯に入ってる写真をどうにか……………って奈々葉に見られた……………」

やばい。2番目に見られてはいけないやつに見られてしまった……………俺はどおすれば……………

その時、ゆっくり扉が開く。

「ナルシストうるさいよ。」

「奈々葉！あれには誤解が……………」

「うつさい。変態ナルシスト。」

「どこらへんが変態なの？」

「全て。じゃ。」

「ま、待て奈々葉…」

そのまま帰っていった。どうしよう。俺このままだったら変態ナルシストのままだよ。よし。明日は休みだしどこかに連れて行ってやるか。でも誘い方が浮かばない。よし。練習するか。

## 第5話 妹を街に誘おう！

妹を自然に誘う方法その1

自然に部屋に入り、

「なあ奈々葉！」

「なに？」

「明日お兄ちゃんと一緒に遊ぼう！」

「やだ。なんでロリコン変態ナルシストと遊ばなきゃいけないのよ。」

まずいまずい！変態ナルシストを無くしてほしいのに逆にロリコンが混ざっていますやん！そりゃあ、年下は………ねえ、読者のみなさん！

共感がないだろ？！まずい！このままでは俺のイメージがホントにロリコン変態ナルシストになってしまう。

………まあいい次！

妹を自然に誘う方法その2

自然に部屋に入る 奈々葉とばったり遭遇 気まずい空気が流れる

空気を変えるため映画のチケットを取り出す 奈々葉にチケットを渡す 破られる…… ロリコン変態ナルシスト決定。

「くわあ！なら最後の作戦を！」

妹を自然に誘う方法その3

奈々葉の部屋に入り…… 踊ってみる もちろん冷たい目をされる  
もはやロリコン変態ナルシスト決定！

無理だ。俺は一生ロリコン変態ナルシストの肩書を背負って行かないといけないのか……

一人で泣きながら考えていると、

「優にいい？」

「はにや！？？」

めっちゃめっちゃ裏声になってます！助けてください！

「なに驚いてるの。まあいいや。そういえば優に明日暇？」

「暇っていったら暇だ！どうしたんだ？」

よし！ここは平然を装うしかないな！

「よかったあ〜じゃあ明日買い物ついてきてよ！」

「おう。わかった！」

「じゃあ明日朝起こしに来るから起きててね」

「わかったよ！」

「じゃあおやすみなさいお兄ちゃん！」

そういつて奈々葉は部屋を出ていった。

一方優祐は……嬉しさのあまり暴れていた。

「おいおい！俺が誘おうとしたのに奈々葉から誘ってきたぜ！ヤツホォー！これでロリコン変態ナルシストから脱出出来るぜ！」

興奮のあまりおかしくなってるようだ。妹に誘われて嬉しいかお兄ちゃんと言われて嬉しいのかは謎である。というよりロリコンは優祐の勝手な妄想である。

そうして夜は静かに過ぎていった。

## 第6話 妹とデート？その1

チュン、チュン。

いつもは不愉快の鳥たちの泣き声も全然気にならず俺は起きた。

すると、トトトと階段を駆け上がる音が聞こえたのでちょっと寝たふりをしようとして布団に潜り込んだ。すると扉が開く音が、そして部屋の中に入ってきた。そして驚かそうとした優祐は布団から顔を出し、

「おはよう奈々葉！」

「きゃ！」

これはいい線いったと事故満足……じゃない自己満足していたら、

「もう優祐ちゃんったら脅かしたがりねー ママさんビックリ！チヨービックリ！」

なぜかオフクロで、そしてベットにダイビングヘッドしてきた。したらトトトと階段を駆け上がる音が………無論奈々葉である。

「お兄ちゃん朝………ってママ！何やってるの！」

「優祐ちゃんったらママに熱いチューしてくれって読んだからそれを実行しようね 人生は何語とも有限実行よ！だからママに熱いチューをちょうだい！」

「いやいや！わけわかんねー！」

「優にいい。最低。」

お兄ちゃんから普通の呼び方に戻っただとお！？ランクが下がった？困る。非常に困った。ど、どうすれば？

「優祐ちゃん！熱いチューをママさんに！早く！」

「ええい！うるさい！奈々葉これは勘違いだ！」

「うるさいマザコン変態ナルシスト。」

こっちはランク上がってる〜！ハハハ。ワタシニハドウスルコトモデキナイヨ。カミサマ。イマシタラアワレナワタクシヲタスケテクダサイ。

「つかマザコン変態ナルシストさん。ご飯出来てるから。じゃ。」

「ま、まで！朝ごはんは何なんだ？」

「いくら丼。」

朝からそれはないだろ！

ツツコム前に奈々葉は出ていった。つか今日の買い物は……

「ま、朝飯食って考えるか。」

とりあえず食べにリビングに降りてみる。そして奈々葉が言っていたいくら丼を平らげて、

「まずは行くのかどうかだな！」

2階に上がり奈々葉の部屋に向かった。すると、

「お兄ちゃん！」

「な、な、奈々葉！」

かなり動揺してしまったぞ？

「早く着替えて行こうよ」

「お、おう！」

「準備できたら下に降りて来てね！」

「おう！待ってる！」

「うん！」

よっしゃ！これキタベ！うん！すぐ着替えて奈々葉の為にイクベ！  
俺は即座に着替えて下に降りた。

「はやっ！早かったね！」

愛しの奈々葉の為さ！

「じゃ、行こう」

俺と奈々葉は玄関を出た。



## 第7話 妹とデートその2

今日は晴天でなかなかいい日だなあ〜！これはデートには最高の日だなあ！

変なこと考えないようにしないとマザロリ変態ナルシストになってしまう。

とりあえず普通に奈々葉の付き添いなんだしのんびりすごそう。

「ねえ優にい！」

「どうした？」

「あれ……………」

奈々葉が指差すほうを見ると……………円香さんだ。何故に円香さんが……………見つかったら非常にやばい。

「奈々葉！とりあえず逃げるぞ！」

「遅いと思うよ……………」

「優祐ちゃん」

な！！

「あら！奈々葉ちゃんも！久しぶりねえ〜」

「円香先輩お久しぶりです。それで何をしてるんですか？」

「んとね~~~~~.....忘れちゃった!」

「円香さんそこまで延ばして忘れるのはだめだって!」

「あら、そう? まあいいわ。ところで二人で今日は何してるの?」

「今日は兄さんにいろいろついて来てもらおうと思って。」

「それで優祐ちゃんもいるのね」

「とりあえず優祐ちゃんは止めてください。なんか悲しいです!」

「気にしない!」

「なんで奈々葉が答えたんだよ!」

「え.....成り行き」

うわあゝなんか奈々葉が円香さん見たいに見えてきたよ。

「まあ私はお二人の邪魔しないように帰るわね!」

「はい。.....ってそんな兄弟でやましい事なんてないですし。ましてこんなマザロリ変態ナルシストなんてね。」

ハハハ。ひどい言われようだ。もうどうにでもなれって感じだよ。グスン。

「あれ? 優にぃなんで泣いてるの?」

「目にゴミが入ったんだよ…グスン。」  
俺はいじられてるのかなあ…………グスン。

「って事でお二人さん私は帰るわねえゝまた今度ゆっくり話は聞かしてもらってから」

円香さん…………とりあえずなにもきかないでね。何されるかわからないから。

「じゃ、行こ」

こゝこいつ…てを組んでくるなんてちょっと積極的じゃないか！お兄ちゃん理性が保てなくなっちゃうぜ！

「ところで優にい？」

「な、なんだ？」

「なんで私たちはてを組んでるの？」

「手を組んで来たのは奈々葉のほうじゃないか お兄ちゃんは嬉しいぞー！」

スパーン！

「奈々葉の蹴りが鼻のこの辺に！」

「うるさい変態。」

スパーン！

「角でけ……」

ゴリッ。

「ぶ………」

「ちょっとやりすぎたかも。優にいい丈夫？」

「ぶ………」

「？」

「ブッフォン………」

ゴリユッ。

「ぐはぁ………」

そのまま優祐は気を失った。

## 第8話 妹とデートその3

海岸の中俺はいた。そこは小さなときに父さんに連れていってもらった事のある小さな小さな海岸。

その海岸の砂浜に立っているのは小さな少女その首には小さな小さな真珠のネックレスをつけていた。

顔から腹から色んな場所の痛みを感じて俺は目を覚ました。

そこは、公園だった。雲一つない晴天で公園内では小さな子供たちがわいわいと遊んでいる。

「何時間俺は気を失ってたのだろう。確か奈々葉に蹴られて気をうしなっただだよな。っかなんか柔らかい枕だな。っか公園に枕なんてあったっけ？」

それが何か確認するために体を起こしてみた。すると、

「あ、起きた？」「なんだ。奈々葉だったのか！………ってええええっ！？」

「な、なによ！」

「な、奈々葉がひざ枕してくれてたのか！？」

「そ、そうだけど？」

ああなんて俺は勿体ないことをしたんだ！もっと寝ときたかったぞ！

「とりあえず奈々葉。」

「なに？」

「もう一度やってくれないか！」

ゴリユッ。

「うわぁ！足をかかとで踏むな！しかもヒールだから足に！足に刺さる〜！」

「うつさい。この変態ナルシスト。」

「最近なんか暴力おおいべ？」

「とりあえず行きましょ。」

「見事にシカトですか！そうですか！」

「はい優には黙ってついてくる。」

「はい…………グスン。」

俺それでも主人公なのになぁ…………

「ここ、ここ！」

奈々葉が指差して向かっている先は……………へ？ランジェリーショッ  
プ？

「優に早くうゝ!」

ま、まさかね!

「ここランジェリーショップだよな?」

「そうだよ!ここに買いたい物があるんだあゝ」  
おいおい。兄ちゃん理性が保てなくなっちゃうぜ!

奈々葉がてくてくとあるいて向かった先には小さな一角にある小さな店に入った。そこは、

「小さな巨人……フェイウオンの店?」

そこはランジェリーショップの一番端っこにある小さな小物ショップだった。

……なんで?

「この店主はちよびつと変態だけどいろいろと小物が揃ってるの!」

「いらつしゃい!おや?奈々葉様、ようこそいらつしゃいました。」

「またきたよ変態!」

「フェイウオンちょっと悲しいです。」

「まあいいや、行こつ!」

「おや？彼氏様ですか？これは始めまして、私はこの店の店主フェイウォンと申します。」

「俺は彼氏じゃなくて兄弟です。」

「そうでしたか。んゝ男にしては勿体ない可愛さですな。」

「優にはこれでいいの！とりあえず来て！」

そういつて連れてこられた場所は……

「かわええ……」

「でしょ！優にかわいい物好きだったから買ってあげる」

「マジで！？じゃ遠慮なく。」

10分迷いに迷って買ったのは、犬と猫がじゃれている小物と、イルカがサーファーとじゃれている小物にした。

「あれ？値札がついてない？フェイウォンさん！」

「それですか。それなら二つで百円です。」

「へ？安すぎませんか？」

「貴方なら大切にしてくれると思ってその値段をつけさしてもらいました。ついでにこれも差し上げましょう。」



差し出して来たのは小さな真珠のネックレスだった。これはさっきの公園で見た夢に少女がつけていたネックレスと一緒にのものに見えた。

第9話 妹と真珠とお爺さん。(前書き)

なんかおかしい文章になってますが気にせず読んでください！

## 第9話 妹と真珠とお爺さん。

小さな夢を見た。小さな公園に小さな少女。そして少女。少女の手には小さな真珠のネックレス。少年の手には小さな真珠のブレスレット。少女は言った。

「また会えるよね？」

少年は笑顔でこう答えた。

「うん！」

.....

.....

.....

.....

...

「優にい？優にいつてば！」

「ああどうした奈々葉？」

「さっきからぼーっとしてばっかりじゃない！」

「んーなんか引っ掛かることがあってね。」

「ひっかかること？」

「うん。フェイウオンさんがくれたネックレスの事だよ。」

「あのネックレスがどうしたの？」

「気絶してたときに見た夢と一緒にネックレスなんだ。」

「どんなはなし？」

俺は奈々葉にさっき夢で見た事を話してみた。

「んーそうなの。」

感心うすっ！やっぱ話さない方がよかったかも…

「それにしてもなんでフェイウオンさんはあのネックレスをくれたんだ？」

「優にいが可愛かったから？」

「あのなあ……」

「だってよくわからないもん！」

プイッとそっぽを向いて歩いていつてしまった。とりあえず追い掛ける。

「なによ？」

「ふてる理由わからないぞ？」

「うるさい！」

「うわ、ばかつ！鞆の角を鼻に当てつぶ！」

「あ。また鼻にいつちやった。テヘッ！」

ぐわあゝ鼻が……しかもテヘッて……かわいいじゃネーか！

「まあいいや。とりあえず優に今日はありがとね！」

「いいて。いろいろと買ってもらったから！」

でも一つ謎が出来たけどね。

フエイウォンさんがくれたネックレスと……あの人がヅラかどうか！

かなりキニナル！

「そつえば優にい？」

「ん？」

「晩御飯の材料買って帰らなきゃ。」

「お？今日は奈々葉が作るのか！」

「うん！」

うちの家族の中で料理を作る人が奈々葉と親父だ。だが親父は派

遣で今ロサンゼルスにいる。

「今日はカレーにしようかなあ……」

「お！いいねー！」

「じゃあカレーにしようかなー！」

「じゃあいつものスーパー行くか……」

「そ、そうね……」

二人が向かった先はタイムサービスの品がとにかく安いスーパー不知火だ。タイムサービスの時間には老若男女とわず品に向かって向かうほどだ。

「つ、ついたわね。」

「よっしゃー！戦争だあ！」

俺はタイムサービスが以外と好きだ。争って争って取れたとき最高に気分が良くなるからだ！  
その時アナウンスが掛かる。

《はいカレーライス用豚バラ肉100g1円！100g1円だよ！  
3番肉売場！肉がほしいやつはかかってこいやあ！》

…何故にアナウンスが喧嘩売ってやがる。

「とりあえず行ってくる！にぐうああいうー！」

肉売場に来てみると、

……今日はひどいな。取らせまいとパックを弾き空に浮いたやつで  
気を引き新しいのを取りに行ってるやつ。爺さんを罠に使って取っ  
てるやつ。爺さんに殴られてるやつ。とりあえずレベルタカイナ……

「だが！俺は引かない！にぐうああいう！」

人込みのなかに地面からヘッドスライディングで滑り込むが……

「これは椅子かのーらくちんじゃなフォッフォッフォッ。」

爺さんが頭の上に正座で座って離れなくなった。

「こんなんで肉が取れない！ふぬうおー！」

爺さんを頭に乘せたまま俺は肉取り合戦に交ざる。  
くそっ！頭が重い。

「爺さん！」

「なんじゃ、若いの。」

「力を貸してくれ！」

「いいじやろっ。」

はやっ！まあいい！

「任せたよ！」

その瞬間首に更に激痛が走る。よく見ると、

「がきどもが！うごくんじゃねー！」

ハハハ。みんな固まってますよ。その隙に肉ゲット！やっぱカレーには肉がないと始まらないからね！

……

……

…

「いい買い物した〜！」

「そうだね〜これでカレーが作れるね〜」

「やっと家についた〜！」

「優にいー！」

「ん？」

「今日についてきてくれてありがとね！」

その時……

「小さな真珠の……ネックレス？」

「え？どうしたの優にい？」



「さっき夢で小さな少女がしていたネックレスと一緒に奴を持ってた人がいたような……」

「きのせいだよ早く家に帰ろうよ!」

「ちょっと見てくる!」

「え? ちょ!」

俺はさっきみた少女を追いつけたが、見失っていた。

「ま、帰るか。お腹空いたし。」

そのまま家に帰った。案の定奈々葉が怒っていた。

「タコ!」

タコって……………

ふう。とりあえずお腹も膨れたから風呂に入るか。

「いいねえこの温度がいいんだよ。」

俺ん家の風呂は少し小さめだが最新の湯沸かし機に音楽が聞けるテレビも付いている。これはオフクロが付けた。ただ風呂のとき体操のお兄さんを見るためらしい。

俺は自分が持つてきたCDを聞きながら夢の事を考えていた。

「とりあえずなにかに巻き込まれていそうだな……ま、いつか。」

そのまま風呂から上がり自分の部屋に上がった。そして今日奈々葉に買ってもらった小物を飾ろうと思い出してみると……

「粉々………?」

原型がないくらい粉々になっていた。奈々葉の鞆に入れてたのがダメだったみたいだ。見つかったら殺される。

「優にい!」

「な、なななな奈々葉!」

「小物飾らないの?」

「まだいいかなあってね。ハハハ。」

ばれないでくれ。

「飾らないんだ〜じゃあみして?」

や、やばい。

「いや俺だけの楽しみに………」

「優にいとりあえず原型がないよね?」

「奈々葉の鞆に入れてたのが悪かったみたいだね。」

「とりあえずお休み。」

ズドッ……

腹部に鋭い蹴りが入りました！………おやすみなさい………グスン。

## 第10話 未知との遭遇（前書き）

テストやらなんやらでかけませんでした。またこれから頑張るので  
高校生日記？をお願いします

## 第10話 未知との遭遇

「なんでこんなことになってんだよ。」

それはあなたがある意味幸運だからだよ。

早朝。

朝早く俺は目が覚めたため外に行くことにした。今朝は7月というのに肌寒い。とりあえずポケットから愛用のセブンスターを出し口に一本くわえ慣れたように火を付けた。

「ふう〜朝の一服はうまいな……………ん？」

ふと公園を見てみると小さな女の子がいた。優祐はさすがに朝の5時からラジオ体操待ちや遊ぶ子はいないと思い声をかけてみることにした。

「ねえねえ。朝早くから一人で何してるの？君一人なの？」

少女は俺を気にせず黙々と砂場で遊んでいた。

（変な子だなあ……………しかもシカトだし）

とりあえず散歩を続けようと思えばあるこうとすると、

「ある人を待ってるの。」

その言い方は、物凄い静かだった。

「誰を待ってるの？おとうさん？おかあさん？おじいちゃん？おばあたん？」

「……………」

し、しまった！ちょっと受けを狙おうとしたら物凄いシラけた目で見られた。こりやおおばあさんもビックリして入れ歯を抜かすね！  
「私が待っているのは、終わりの始まり。」

「……………？」

優祐はこの少女が何を言っているかわからなかった。なんかのゲームかなかな？

「まさかゲームの何かかとおもってないよね？」

ばれた！ってかばれてる……エグエグ泣いちゃいそう……エグエグ。

「私は、世界から世界を救うためにやって来た。終わりの始まりと言うのは、文字通りだが、ここにいれば会えると思って遊んでいる。」

優祐は、一息煙を吸い込み、ふーとはいってこう言った。

「よくわからないよ？話の内容も読めないし。世界から世界を救う？どーゆーこと？」

「今世界は、世界に飲まれようとしている。そこで世界が世界に飲まれない為に私たちがいる。」

「まったくわからんな。第一お前はなんでこんなことするんだ？」

「人類が世界に飲み込まれないように。」

「とりあえずそんな体でなんで世界を守れるのか？」

「動きやすいようにしてるだけよ。元に戻ってあげる。」

すると、小さかった体が見る見るうちに俺らと同じぐらいの年齢になった。体型はモデル体型で、髪はどこまでも漆黒で、肩の下まで伸びている。慎重は優祐と一緒にちよつと低めだ。

「これで理解したか？」

「あ、ああ……」

くわえていた煙草を消し、携帯用の灰皿にいれた。

「んで、終わりの始まりって？」

「ああ。君は一日の終わりっていつだと思っ？」

「夜の１２時じゃないの？」

「違うな。確かに日にちが変わるのは深夜１２時だ。だが、それが終わりの始まりになるのか？」

「……………」

「つまり、終わりの始まりってのは、一日で何かが変わって何かが終わるときってことだ。」

「太陽が沈んで月が出るときわ？」

「そうだ。」

「じゃあ朝方でもないか？」

「そうだ。」

「つまり、終わりの始まりはそーゆーことになるのか。」

「そーだね。だから私は毎日ここで見張っている。終わりの始まりが現れるまで。」

「大変だな。まあ頑張るな。」

「君。レディーを一人で遊ばしているのか？」

「あんた……つまり寂しいわけ？」

「そ、そんなわけない。私は君にも見てほしいだけだ。この世界を。」

「なんで俺なんか？」

「君はなんか懐かしいんだよ。」

「なんだそ……」

「……！危ない！」

そいつって少女は優祐を吹き飛ばした。優祐はわけもわからなかつ



たが理解には時間がかからなかった。

「まさか……終わりの始まり……か！」

「そーみたいだね。」

「ねえあんた。これって人じゃないか？」

「そうよ。人は何か自分通りに行かなかったらなにかを怨む。その怨みが溜まりにたまって爆発したら、それが世界を飲み込もうとする。それがこいつさ。」

なるほど。……ってどーやってこいつ倒すの？

「心配はいらない。私に任せろ。」

「わかった！とりあえず頑張って！」

だが逃げようとする優祐に終わりの始まりは容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

「う、うわあああ……」

「……………夫ですか？」

え？

「……………丈夫ですか？」

「大丈夫ですか？」

目が覚めるとさっきの場所に寝ていた。確か俺は終わりの始まりに殺されかけて……………

「ねえきみ！終わりの始まりは？どこにいったのさ？？」

「なんですかそれ？……………？」

あ、あれ……………さっきまでは夢だったか……………

「じゃあ私は学校に行かなくてはならないので。」

「な、名前だけでも教えて！」

少女は後ろを向き小声で

「すぐ知ることになるのに……………」

「ん？なんかいった？」

「何も言っていないよ。私は竹内千里。じゃあ私は先に行くね！学校頑張れ！」

そおいつて千里は走っていった。ってまさか恋の予感か？？？

「ないよ。優にい。」

「な、奈々葉朝早いな！」

「あのもう8時だよ？」

「え…………とりあえず…………やべえ！」

俺何時間眠ってたんだよ…………俺はマツハで家に帰った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6414a/>

---

高校生日記？

2011年1月4日15時33分発行